

●人は何歳になっても知りたがり！

Q 大橋先生は「人間は一生、知的欲求が尽きない」との持論をお持ちですが、
Question 「老いて学ぶ」ということについてどのようにお考えですか。

学生や社会人と同様、定年を迎えられたシニアの方々も、当然「いろいろなことを学んでみたい」と思う旺盛な知的欲求を持っています。

ただ、それは「新しい技術を身につけよう」とか、「それを勉強して生活の糧にしよう」というような実務・実利的な興味ではなく、もっと自分の人生に深くアプローチするような、抽象的で観念的なものに知的興味を持つ傾向が強いといえるでしょう。

人は定年後、およそ20～30年にもわたる「セカンドステージ」を迎えるわけですが、「自分はどのように生きていくべきか」「何を目的に生きていくのか」という思想性がなくては、誰も生きていくことはできません。より善く生きるためには、こうした「自分の人生に対する論理的な整理」という作業がどうしても必要なのです。そのため人は、何かを「知りたがる」のだと思います。

また、「真摯に自分を見つめ直す」ということが、結局はその人のためだけでなく、社会全体にとっても、とても必要なことなのではないかと私は思っています。赤ちゃんからお年寄りまで、あらゆる世代の人々が一所懸命生きて、ともに社会を構成していく。そういう人々を全部包摂して、はじめて健全な社会になることができるのだと考えています。



老いて学ぶ

●シニア世代に向けて大学ができること——立教大学の取り組み

Q 立教大学でもシニアの世代に向けた新しい「学び舎」の開校を計画されているとお聞きしていますが、それはどのようなものなのですか。

立教大学では、2008年4月をメドに、これから定年を迎えようとしている団塊の世代を対象とした「立教セカンドステージ大学」を開校する予定です。

2007年問題という形でよくマスコミなどで報道されていますが、今後3～4年の間に団塊世代の多くは定年退職を迎え、自らのセカンドステージをデザインすることが求められています。

私たちは、この世代の人たちをコミュニティや社会のレベルで受け止め、彼ら／彼女らが自らの人生をデザインできるようにサポートし、学習する機会を提供していくことが大学の新しい使命であると考えています。そうしたミッションをベースに、私たちは「立教セカンドステージ大学」の設立を構想しています。

具体的には、池袋キャンパスと少子化で閉鎖になった豊島区立の小学校の施設を「立教セカンドステージ大学」の施設として再利用し(2010年4月以降)、55歳以上の団塊世代の男女を対象に広く入学を呼びか